

## 牧谿筆「観音鶴猿図」の制作背景に見る「康国」と「鎮魂」

田中 伝 (成城大学)

「観音鶴猿図」三幅対(大徳寺)は、南宋時代末期の画僧牧谿(活躍期:13世紀後半)の代表作例として数多くの言及がなされてきた。しかし、観音とその左右に猿・鶴を配するという構成がいかなる意図をもつのかについて、見解は統一されていない。本発表では本作を改めて宗教絵画として捉え直し、当時の社会と牧谿が活動した南宋の首府臨安という場に立ち戻ることで、その制作背景を考察したい。

本作は、牧谿自ら落款に「謹製」と書いていることから然るべき人物の依頼があったこと、それも大幅の絹本に描かれていることから何らかの公的な意味合いをもって制作されたことが想像される。

ここで本作の観音図との関連が想起されるものに、牧谿の住した六通寺からほど近くに位置する臨安の大刹上天竺寺の観音が挙げられる。この観音は、南宋成立期より鎮護国家の尊像として皇帝とも深い繋がりを持ち、容姿に女性性が看取される本作の観音図と同じく「白衣」「女人」の姿で示現することが説話中に認められる。また牧谿の活躍期をやや遡る1241年、皇帝理宗は夢に感得した観音の姿を石刻させ上天竺寺に奉納したが、その図様は「竹石の間に坐す」もので、本作の観音の姿を彷彿とさせる。この観音に付した理宗の賛から、理宗は観音に戦役の終結と国家の安泰を祈願していることが読み取れる。当時の南宋はモンゴルの侵入やうち続く天災など内憂外患の時期であったが、観音の感得の後モンゴルとの和議が成立したことから、上天竺寺の観音は理宗による石刻図像とともに、より強固な鎮護国家のイメージが附与されたと考えられる。こうした臨安における観音信仰の文脈からすれば、本作の観音図にも康国の意味を読み込むことが可能となる。

このような視点に立って本作の左右に配される猿・鶴の意味を考察すると、「猿鶴」の語が「戦没者の亡魂」の比喩的表現として歴世の文学作品中に散見される点が注目される。これは周の穆王が南征した際に戦死した君子が猿鶴に変化したという『抱朴子』の逸話を典拠とする。更に母子の猿の表現は、『世説新語』中の「断腸」一則に、蜀への遠征途上の兵士に捕らえられた子猿を思う母猿が、嘆き悲しむあまり腸が千切れて死んだという故事一を連想させ、モンゴルとの戦乱で荒廃した蜀の民の姿も重ね合わされていると考えられる。

ここで本作を牧谿に依頼した人物として、宋朝の権臣賈似道(1213~1275)の存在が浮上する。賈似道は、1259年に終結したモンゴルとの戦争に勝利したことで凱旋將軍となった直後、上天竺寺に大規模な施田をした。自ら著した施田記によれば、戦争による民の死や、母子骨肉の離散という惨状こそ、上天竺寺への施田の契機となったという。当時最も権勢を誇り、書画のコレクターとしても知られ、さらに牧谿との交流も指摘される賈似道が、モンゴルとの戦役の終結という「康国」と、戦没者の「鎮魂」を願い、牧谿に本作を描かせたという新しい解釈を提示する。